

長野県のツレサギソウ属植物

井 上 健¹

K. Inoue : *Platanthera* in Nagano Prefecture.

私は以前の論文で日本のツレサギソウ属植物として変種以上のランクで22種 6亜種 6変種の34分類群を認めました(表1)。私の見解とそれまでの大井先生や前川先生の見解との大きな相違点としては、1) 通常別属とされているトンボソウ属をツレサギソウ属の1グループとして位置づけたこと、2) 通常別種とされるキンチドリとヤマサギソウとを一つの種内の多型として認識した点などを挙げることができます。それはともかくとして、長野県には34分類群のうち、12種 2亜種 2変種の16分類群が存在しており、ツレサギソウ属植物に関しても長野県は豊富な植物相を有しているといえます(表1)。長野県植物誌チェックリスト(1988年度版)ではヒロハノトンボソウとミヤマチドリの2種が抜けています。この小文では長野県のツレサギソウ属植物について簡単に解説したいと思います。

1) タカネトンボ 北海道には比較的多いが、本州中部では稀な種。草丈5~10cm程の小型の植物、北アルプスの高山帯に生育する。北米からアリュシャン、サハリン、千島、日本に分布する。

2) ジンバイソウ 日本特産種。北海道南部から九州までの冷温帯の森林の林床に生育する。長野県でも比較的個体数は多いと思われる。対生上に地表に展開する2枚の葉とストロン状に伸長する塊茎などの特徴がある。

3) ヤマサギソウ複合体 この複合体はキンチドリ群、ヤマサギソウ群、ハチジョウチドリ群に大別することができますが、長野県にはこのうちキンチドリ群が多様な変異を示しています。キンチドリは亜高山針葉樹林の林床もしくは林縁、タカネサギソウは高山帯の草地に生育する。マンシュウヤマサギソウはタカネサギソウが亜高山帯の湿原や草原に降りてきて大形化したものと考えられます。この群はシベリア・中国東北部から朝鮮・日本の亜高山帯から高山帯にかけて多様に分化した群と考えられます。一方、ヤマサギソウ群は中国南部から西南日本の暖温帯の草原や湿原に生育する群ですが、チェックリストでは下諏訪町からヤマサギソウが報告されています。

4) ミヤマチドリ ミヤマチドリは南アルプスの高山帯の草地、ガッサンチドリは裏日本の亜高山帯の林縁部に稀に生育しています。いずれも日本特産で、ミヤマチドリの距は長さ2mm前後、ガッサンチドリの距は長さ3~4mmという特徴があります。

5) オオバノトンボソウ 中国・台湾から日本の暖温帯の林床に生育する種で、長野県が分布の北限になっているようです。長野県の低地では比較的普通の種類でしょう。

6) ホソバノキンチドリ ホソバノキンチドリは亜高山帯の林縁部から草地・湿地、コバノトンボソウは亜高山帯から暖温帯の湿地に生育しており、個体数は比較的多い。ホソバノキンチドリの距は2cm前後で水平か下向き、一方コバノトンボソウの距は、1.5cm前後で上向きという特徴があります。種としてはアリュシャンからサハリン、千島、日本と太平洋西部沿いに分布する。

7) オオヤマサギソウ 冷温帯から亜高山帯の林縁部から稀に湿地に生育する種で、生育個体数は比較的多い。やや対生状の2枚の葉と白味を帯びた花の色が良い識別点になる。サハリン・千島から日本・台湾に分布する。

8) ツレサギソウ ネパール・中国南部から朝鮮・日本(北海道南部まで)の暖温帯・冷温帯の草原に生育する。以前は比較的多かったが大形で白い花のため乱獲により稀な種類になったと考えられる。長野県でも2、3ヶ所から報告されている。この種はトンボソウ群から特殊化の進んだ種ではないかと推定している。

9) ミズチドリ 暖温帯から冷温帯の湿地に生育する。個体数は比較的多いようである。長野県でも比較的多くの産地が報告されている。開花期には白い花がよく目立ち、区別は容易である。一見似ていないトンボソウと類縁が深いのは興味深い。近縁種が北米にある。南千島から日本・朝鮮・中国に分布する。

10) シロウマチドリ 亜高山帯の林縁や高山帯の草地に稀に生育する。長野県では現在北アルプスからしか報告されていないが、南アルプスにも生育するので南アルプスの長野県側からも発見される可能性がある。北米からアリュシャン・千島・日本に分

¹ 松本市旭3-1-1 信州大学教養部生物

表1 日本のツレサギソウ属植物 *Platanthera* の分類システムと長野県における分布

	Ohwi (1975) Hatusima (1975)	Maekawa (1971)	Inoue (1982, 83)	長野県 の分布
タカネトンボ	<i>P. chorisiana</i>	<i>P. cho</i>	<i>P. cho</i>	×
ニイタカチドリ	<i>P. brevicealcarata</i>	<i>P. bre</i>	<i>P. bre</i>	
フタバツレサギ	<i>P. metabifolia</i>	<i>P. met</i>	<i>P. met</i>	
ハチジョウツレサギ	<i>P. okuboi</i>	<i>P. oku</i>	<i>P. oku</i>	
ジンバイソウ	<i>P. florentii</i>	<i>P. flo</i>	<i>P. flo</i>	×
	<i>P. ophrydioides</i>	<i>P. oph</i>	<i>P. man</i>	
オオキソチドリ	var. <i>ophrydioides</i>	var. <i>oph</i>	s. <i>oph</i> v. <i>oph</i>	×
キソチドリ		var. <i>monophylla</i>	s. <i>oph</i> v. <i>mon</i> f. <i>mon</i>	×
ナガバノキソチドリ	f. <i>australis</i>	var. <i>aus</i>	v. <i>mon</i> f. <i>aus</i>	
ヤクシマチドリ	var. <i>amabilis</i>	var. <i>ama</i>	<i>P. ama</i>	
ミヤマチドリ	var. <i>takedae</i>	<i>P. tak</i>	<i>P. tak</i> s. <i>tak</i>	×
ガッサンチドリ	var. <i>uzenensis</i>	<i>P. uzen</i>	s. <i>uze</i>	×
	<i>P. mandarinorum</i>	<i>P. man</i>	<i>P. man</i>	
ハシナガヤマサギソウ	var. <i>mandarinorum</i>	var. <i>man</i>	s. <i>man</i> v. <i>man</i>	
マイサギソウ		<i>P. neglecta</i>	v. <i>neg</i>	?
ヤマサギソウ	var. <i>brachycentron</i>	var. <i>man</i>	v. <i>bra</i>	?
タカネサギソウ	var. <i>maximowicziana</i>	<i>P. max</i>	s. <i>max</i> v. <i>max</i>	×
マンシュウヤマサギソウ			v. <i>cornu-bovis</i>	×
ハチジョウチドリ	var. <i>hachijoensis</i>	<i>P. oph</i> v. <i>hac</i>	s. <i>hac</i> v. <i>hac</i>	
アマミトンボ	<i>P. amamiana</i>		v. <i>ama</i>	
アマミトンボモドキ			v. <i>masamunei</i>	
オオバノトンボソウ	<i>P. minor</i>	<i>P. min</i>	<i>P. min</i>	×
	<i>P. tipuloides</i>	<i>P. tip</i>	<i>P. tip</i>	
ホソバノキソチドリ	var. <i>tipuloides</i>	var. <i>tip</i>	s. <i>tip</i> v. <i>sororia</i>	×
ツブラトンボ		var. <i>sororia</i>		
コバノトンボソウ	var. <i>nipponica</i>	<i>P. nipponica</i>	s. <i>nip</i>	×
ナガバトンボソウ	var. <i>linearifolia</i>	<i>P. tip</i> v. <i>lin</i>	s. <i>lin</i>	
オオヤマサギソウ	<i>P. sachalinensis</i>	<i>P. sac</i>	<i>P. sac</i>	×
オオバナオオヤマサギソウ	var. <i>hondoensis</i>	var. <i>hon</i>	<i>P. hon</i>	
ツレサギソウ	<i>P. japonica</i>	<i>P. jap</i>	<i>P. jap</i>	×
ミズチドリ	<i>P. hologlottis</i>	<i>P. hol</i>	<i>P. hol</i>	×
シロウマチドリ	<i>P. hyperborea</i>	<i>P. hyp</i>	<i>P. hyp</i>	×
トンボソウ	<i>Tulotis ussuriensis</i>	<i>T. uss</i>	<i>P. uss</i>	×
イイヌマムカゴ	<i>T. iinumae</i>	<i>T. iin</i>	<i>P. iin</i>	
ヒロハノトンボソウ	<i>T. asiatica</i>	<i>T. asi</i>	<i>P. fuscescens</i>	×
ムニンツレサギ	<i>P. boninensis</i>	<i>P. bon</i>	<i>P. bon</i>	
タイトントンボソウ	<i>P. stenosepala</i>		<i>P. stenoglossa</i>	
イリオモテトンボソウ	<i>P. iriomotensis</i>		<i>P. ste</i> s. <i>iri</i>	
ソハヤキトンボソウ			s. <i>hottae</i>	
ソノハラトンボソウ	<i>P. sonoharai</i>		<i>P. son</i>	

布する。北米でこの群は多様に分化している。近縁種がハワイにあるのは興味深い。北米の個体が倍数性と自殖性が報告されている。

11) トンボソウ 暖温帯から冷温帯の湿地・草地・林縁部に生育する。個体数は比較的多い。長野県でも低地に普通の種である。小形の目だたない花と8月ごろの遅い花期で特徴付けられる。日本から朝鮮・中国にかけて分布する。

12) ヒロハノトンボソウ 冷温帯から亜寒帯の林床・林縁部に稀に生育する。シベリアからウスリー・サハリン・中国東北部・朝鮮・日本に分布する。本州では長野県とその周辺地域から散発的に標本が採られている。すなわち、大陸から飛び越え型の分布

パターンを示す。大陸では比較的個体数が多いようである。オオヤマサギソウに似た草姿をしており、唇弁に側裂片があるのが識別点になる。

おわりに 長野県はツレサギソウ属植物相においても他の植物と同様に日本の暖温帯から高山帯に生育する種の大部分を有しています。ツレサギソウ属植物は比較的極相的な自然度の高い植生に生育しており、長野県が豊富なツレサギソウフローラを持つことは自然度の高い多様な環境を有していることを意味しているといえるでしょう。この小文でリストアップした12種の生育環境を保持していく事が人間生活の質の維持の上からも重要と思われます。

〔新刊紹介〕長野県造園修景協会（会長亀山章）編。B5判95頁。原色写真多数。信濃毎日新聞社発行。1988年12月発行。1,800円。

この本は、県内の町なかに植えられた街路樹と、神社や寺院の参道・街道筋に植えられた並木について記したもので、街路樹の本数、道路延長、緑量（緑化体積）、樹種などについて市町村別に調査したものがあげられ、各地の実態がそれぞれ美しいカラー写真を沢山使って紹介されている。

又、街路樹の歴史とか、町並と街路樹が如何にその景観をひきたてているかを具体的に示され、又、街路樹の仕立方や、街路樹が動物や小鳥を育むためにどのように役立っているかを説明している。

そして、広葉樹の葉の形による検索表をつけてわかり易く説明しており、更に各樹種の説明も写真と共に具体的に示すなど、その文や写真の組み方にもいろいろと工夫がなされていて、読む人の好みに応じて選択し拾い読みもできる。

並木についても、古いものが多く歴史をとどめるシンボルとして残していきたいもので、そのためには枯木の補植をしたり、樹木の生活環境の改善に努めなくてはならないことが述べられ、筆者の樹木による景観保全に対する愛着が表われている。

又、中国やヨーロッパ諸国の町並景観と調和した街路樹の写真もいくつか示されており、更に郷土の生んだ白沢保美林学博士の街路樹との関わりについて記されるなど、街路樹全般に亘って簡潔ながら要を得た説明をしている。

亀山会長が文中で「街路樹は町なかの景観を美しく豊かにして、住んでいる人達に快適さを与え、地域に誇りと愛着を持たせる」と言っているが、そのことをほんとうにわかっている本である。（S.S）

〔新刊紹介〕矢野悟道（編）「日本の植生……侵略と攪乱の生態学」B5判、226+16頁、東海大学出版会、1988年10月11日発行。

本書は「侵略と攪乱の生態学」の副題が示すように、日本の自然植生が人間の活動を中心にした様々な要因によりどのような変化を受けているかを15人の著者が分担執筆したものである。

内容は4部から構成されている。第Ⅰ部は全体の導入部となっており、日本本来の自然植生が要領よくまとめられている。

第Ⅱ部は人間の活動により植生が自然植生から代替植生へどのように変化を受けているかを取り扱っている。人間活動として、農業・牧畜・燃料としての薪炭利用・林業・河川管理・踏みつけやゴミ捨てなどの日常生活を取り上げ、人間活動の場に侵入する植物やそこに成立する植物群落の特性を述べている。いくつかのいわゆる雑草群落の成立にも言及されている。

第Ⅲ部が比較的恒常的な代替植生の成立機構に焦点が当てられていたのに対し、第Ⅳ部は自然植生に対する短期的な攪乱の影響とその後の植生の遷移という動的な側面が強調されている。攪乱要因としては、野生草食獣・山火事や火入れ・湿原の踏みつけ・除草剤散布などが取り扱われている。また第Ⅲの後半では攪乱によって生じるハビタットに侵入する植物の種生態をタンポポ・ヒメジョオン類・クズを題材に例示している。

第Ⅳ部では花粉分析の研究結果に基づき、人間活動による攪乱の歴史が提示されている。16頁の引用・参考文献と明治以降に導入された牧草の付表も参考になる。（K.I.）